

目離せぬロシア、中国の軍事力

航空自衛隊第6航空団司令 小松基地司令 ◎織田邦男

日本海は、陸上の防衛力で考えると、70個師団分の戦略的価値があるといわれる。しかし、空から見れば日本海の戦略的価値は無きに等しい。

小松基地から飛び立つと領海の外までわずか1分。基地のレーダーで見える範囲はせいぜい300マイル（480キロ）しかなく、

小松基地にはF15戦闘機が約40機配備されている



戦闘機なら30分もかからない。そこに国境があるのと同じだ。

旧ソ連の偵察機がしばしば日本領空近くに飛来していたころ、スクランブル発進して接近すると、尾翼に赤い星をつけた爆撃機と自分が操縦する戦闘機の間に見えない国境があると感じた。われわれの平時の任務は、「国境警備隊」であると思っている。

2倍に増えたロシアの航空活動

東西冷戦の終結で、緊張緩和が進んだといわれるが、私はそうは思わない。短期的には朝鮮半島、中長期的には中国、ロシアの軍事力をよく見ておく必要がある。

ソ連が崩壊したとき、マスコミは軍人に給料も払えず、軍隊は機能していないと報じた。しかし、その後のロシア軍の動きを見ると、徹底したダウンサイジング（小型化）をやり、それに伴って軍組織を改編してきた。今年度のロシア空軍の航空活動は、昨年度

の倍になった。ソ連崩壊でがたがたになった軍事力の低下が底打ちし、着実に回復してきている。

自衛隊はパイロットと技術者を2回、ロシアに送っているが、パイロットはロシアの最新鋭戦闘機に乗り、その性能のすごさに腰を抜かして帰ってきた。昨年送った技術者は民営化された航空機の研究所を視察し、そこでも腰を抜かした。超音速風洞の実験装置がすべて地下施設の中に収まっている。実物大の航空機が入るような超音速風洞を一目見れば、開発力がどれほどのものかはすぐ分かる。航空機の生産も民営化されている。すばらしく性能がいいから外国にも売れる。当然、今後も輸出は増えるだろう。

かつけるロシアと中国

今の現状をロシアの歴史と照らし合わせてみると、興味深いことが分かる。1917年（大正6年）にロシア革命があり、その2年後



織田邦男・小松基地司令

おりたくにお
千葉県出身。昭和49年、防衛大卒。米空軍大学、スタンフォード大留学。防衛大卒業後に配属されて以来、2度目の小松基地勤務となる。飛行時間3500時間を超える現役のベテランパイロット。48歳。空将補。

日本は「もはやロシアの脅威はなくなった」と帝国国防方針に記し、軍縮を行った。その結果、1939年（昭和14年）のノモンハン事件で、旧日本軍は、近代装備を持つソ連軍にこてんぱんにやられ、ツケを払わされた。

2月8日発表の米国2000年国防報告は、2015年（平成27

年）、ロシアと中国は米国と競い合う大国になり得ると指摘した。2015年といえば、ソ連の崩壊から24年後になる。これをロシア革命に置き換えると、2015年はノモンハンで日本軍が徹底的にやられた時期と重なる。

ロシア革命から12年後、ソ連ではスターリンの独裁が始まり、強

注1 ノモンハン事件 昭和14年6月、旧満州と外蒙古の国境で、関東軍とソ連軍が激突した。火力・機動力に勝るソ連軍の前に、日本の23師団は壊滅状態に陥った。



F15は世界最強の戦闘機だ



基地の目と耳は最先端のハイテク技術で支えられている

注2
カール・フォン・クラウゼヴィッツ プロシアの軍人。
近代戦争の本質を説いた「戦争論」は軍人必携の書といわれた。

注3
カール・マルクス ドイツの社会主義者。
科学的社会主義（共産主義）の創始者。

私は中国を「パワーポリテイクス（武力を背景にした外交の信奉者）」と見ている。カール・フォン・クラウゼヴィッツとカール・マルクス、この「2人のカール」の信奉者と言ってもいい。「戦争とは他の手

段をもつてする政治の継続」、「政治とは血を流さない戦争」が彼らのテーゼだ。
1996年（平成8年）の中台危機のとき、中国は多くのミサイルを撃ち込んで台湾を威嚇した。実は、あのとき、中国は台湾と日本領海にもミサイルを撃とうとしていた。誤って撃つたことになって、威嚇しようとしたといわれている。それをやめさせたのは、2隻のアメリカ空母だった。空母が出てくると、中国から見れば周辺地域のパワーバランスが一挙に崩れてしまう。虎の尾を踏んではいけないという判断でミサイル発射をやめたのだらう。
中国は1995年（平成7年）、フィリピン領海内のミスチーフ岩礁に勝手に建物をつくり軍隊を置いた。フィリピンのスービック基地からアメリカ軍が撤退したこと



夕焼けを切り裂いて飛び立つF15戦闘機



基地のメインポールにひるがえる日の丸



基地の警備を受け持つ警備隊員



基地内のすべての物事は、ラッパで始まり、ラッパで終わる

日本領海に中国のミサイル

中国は湾岸戦争でアメリカのハイテク兵器のすごさにショックを受けた。それ以降、中国の国防費は毎年2ケタの伸びを示している。国防費の2ケタの伸びがどれほどすさまじいものか、われわれにはよく分かる。
私は中国を「パワーポリテイクス（武力を背景にした外交の信奉者）」と見ている。カール・フォン・クラウゼヴィッツとカール・マルクス、この「2人のカール」の信奉者と言ってもいい。「戦争とは他の手

段をもつてする政治の継続」、「政治とは血を流さない戦争」が彼らのテーゼだ。
1996年（平成8年）の中台危機のとき、中国は多くのミサイルを撃ち込んで台湾を威嚇した。実は、あのとき、中国は台湾と日本領海にもミサイルを撃とうとしていた。誤って撃つたことになって、威嚇しようとしたといわれている。それをやめさせたのは、2隻のアメリカ空母だった。空母が出てくると、中国から見れば周辺地域のパワーバランスが一挙に崩れてしまう。虎の尾を踏んではいけないという判断でミサイル発射をやめたのだらう。
中国は1995年（平成7年）、フィリピン領海内のミスチーフ岩礁に勝手に建物をつくり軍隊を置いた。フィリピンのスービック基地からアメリカ軍が撤退したこと



ずらりと並んだF15戦闘機。日本海の空を守る主役だ



鋭い金属音とともにF15が飛び立つ



織田基地司令は現役のパイロットでもある



F15のエンジンを整備する整備員

危うい尖閣列島の制空権

1992年(平成4年)に中国は尖閣列島を自国領土であると主張した。尖閣列島が今も日本の実行支配下にあるのは、尖閣列島の制空権を日本が握っているからだ。だが、日中の航空勢力が逆転したとき、パワーバランスの信奉者はどうするか。われわれはパワーバランスが逆転する2010年から2015年あたりの中国の軍事力を想定して今のうちに準備し、練成を図っていかなければならない。

日本ではパワーバランスの観点で国際政治を見る人は少数派だが、アメリカではごく普通のことだ。私がアメリカのスタンフォード大に留学していたとき、そうした議論をよくたかかわせた。だが、日本では、安全保障に対する議論を避けているようなところがある。だからこそ、われわれ自衛隊がよくよく分析して情報発信していくことが必要だと思う。

10年前、私が空幕にいたときに議論していた早期警戒管制機(AWACS)が今年、実戦配備された。予算要求から運用段階になるまで10年かかった。実際、航空防衛力をつくるには長い年月がかかる。パイロットを一人前に育てるためにもその程度の時間が必要になる。将来を見据えて準備しておかなければならないのはそのためだ。

北朝鮮基地への攻撃は不可能

北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)に関しては、テポドンが飛んでくる可能性はあっても、航空機による直接的な脅威はない。もし何かあったときは米軍が主体となって活動し、われわれはそれに対して、支援する。その支援態勢をつくっておくことで、野心を封じ込めておくというのが一番正しいと思う。ガイドライン関連法により国家の姿勢、国家のメッセージが示されたと考えている。

北朝鮮の戦闘機は旧式のミグ21やミグ23を約200機、最新のミグ29は約20機持っている。しかし、燃料不足のため十分な訓練ができず、ミグ29も実際に動いているのは10機ぐらいだろう。

これに対し、小松基地には約40機、2個飛行隊のF15戦闘機が配備されている。小松基地に最初に配属されやっと飛べるだけという新人から、ベテランの教官までが日々訓練に励んでいる。日本の戦闘機パイロットの技量は、旧海軍でいえば、空母「加賀」や「赤城」のゼロ戦ファイターに劣らない素晴らしい水準にあると思っている。

たとえば、戦闘機が攻撃を仕掛けてきても、われわれの戦力を持ってすれば対処できる。むしろ、戦うには国家の決心が必要だが、ミグ29に対しても互角以上に戦えるし、



F15戦闘機を誘導する



F15戦闘機の離陸時間は驚くほど短い。あっという間に天空に駆け上がる



着陸したF15戦闘機に整備員が駆け寄る

訓練状況やパイロットの資質、レーダーの能力を総合的に考えれば、赤子の手をひねるようなものだ。

テポドンについては、通常弾頭であれば問題にならない。だが、核弾頭が付けば、大きな被害をもたらすし、それに対応すべき手段もない。もしテポドンが一発でも国内に落ちたら、自衛隊は何をやっているのかと言われるかもしれないが、専守防衛という国策を取っている以上、自衛隊にはおのずと限界がある。

国会ではテポドンの基地をたたくべきだという論議もあるが、航空自衛隊は現在、そうした攻撃能力を持っていない。また、訓練もしていない。だから、そのような危機がきたら、アメリカにたたいてもらわなければならない。安全保障を担当する者としては、切歯扼腕せざるを得ないが、それが現実だ。

空中給油機を必要とするわけ

仮に攻撃できる能力を持つとするなら、兵器体系を変える必要がある。まず、攻撃目標を探す能力、対空火門を無力化する電子戦の能力もある。精密な偵察衛星、対地ミサイルなどの攻撃兵器の整備も必要だろう。さらに訓練期間を考えると、やはり10年はかかると思われる。空中給油機があれば、攻撃でき

る、足が伸びるから近隣諸国に脅威を与えるというのは大きな間違いだ。われわれが空中給油機を必要とするのは、少ない戦闘機を効率的に使いたいという一点に尽きる。空中給油機を持てば、あたかもどこかに攻めていけるかのようにいうのは、中国などのプロバガンダ（組織的宣伝）に乗せられた結果だ。

尖閣列島の制空権を見た場合、空中給油機を持てば、200機の戦闘機を400機として使える。もし日本が空中給油機を持ったら、中国は、日本をしのぐ航空勢力を準備するための時間がさらに必要になる。空中給油機を配備すると、中国が脅威に感じるからやめるべきだというのは、あまりにもお粗末な議論だ。中国は既に空中給油機を持っているのだから。

防衛力というのは、温かい鉄板の上に氷の塔を載せるようなもので、時間とともに下からどんどん溶けてしまう。現状に安住していたら逆転される。

相手の軍備のペースや兵器の質を見ながら、できる範囲でデータを取り、それをもとにシミュレーションしながら防衛力整備に反映していかなければならない。

自衛隊が抱える弱み

小松基地に弱みがあるとすれば、それはわが基地だけにあるのでは



ベテラン整備員の周りに若手が群がる。職人の技をかいま見る一瞬だ



繊細なハイテク兵器を陰で支える整備員



最終点検は、やはり人間の目が頼りだ

なく、自衛隊全体が抱えている問題である。それは「平時法制」がしつかりしていないことだ。私は、有事法制という言葉がきらいだ。航空自衛隊は何かことがあれば、一番最初に働かなくてはならない。だから、「平時法制」がしつかりしていないとパイロットが迷う局面が出てくる。

わかりやすい例で言えば、朝鮮半島で武力衝突があり、米軍の輸送機が韓国から家族を避難させたとする。このとき、小松基地では

自衛隊法84条に基づく対領空侵犯措置のため、警戒態勢のレベルを上げ、おそらく空中哨戒をやることになるだろう。

哨戒中、米軍の輸送機が見え、その後ろにミグ29が接近し、まさに銃口を開こうとしたとき、どうしたらいいのか。

公海上を飛ぶ米軍輸送機を守るうとしても、今の自衛隊法では、撃つ根拠がない。領空侵犯される恐れがない航空機を撃てば、大問題になるのは間違いない。しかし、だからといってミグ29を撃たずに輸送機が撃墜されたら、日米安保は終わってしまうだろう。

この時、パイロットは苦渋の選択を迫られる。私はそんな国家の重大事項をパイロットに判断させるべきではないと思っている。

現実的な事態を想定して、起こるべき問題にこう対処する、という取り決めを定めることは非常に大切なことで、これが「平時法制」だと思う。諸外国は、当然きちんと決めている。アメリカは大統領が判断すれば、武力行使については各司令官に任せることになっている。われわれ自衛隊も国家の明確な命令の下で働かせてほしい。シビリアン(文民)は、われわれをしっかりとコントロールしてほしいと思うのだ。

命をかけたボランティア

小松基地の強みは、地元の方々の県民性、市民性にあると思っている。常識的で、自衛隊に對し理解がある。自分たちを認めてくれる、ということが、どれほど隊員の励みになり、士気を高めていることか。

最近よくボランティアという言葉聞く。ボランティアの意味は「志願兵」だ。私は若い隊員たちに「自衛隊は最上のボランティア」と言っている。つい先日の入隊者激励会でも、「ここに金もうけをしようとか、名声を得たいと思う人がいたら、ただちに帰ってくれ」と言った。

自衛隊は給料をもらっているじゃないか、という人もいるだろうが、われわれは階級に応じた生活費をもらっているのだから、基本的にはボランティアだと考えている。自分の命をかけてやるボランティアはただ一つ、自衛隊だけ。だから「日陰者」と言われてもいい。だが、今は公のために尽くすことを教える教育をしていない。国家、国防、国益、奉仕、忠誠などの言葉は死語になっている。命をかけたボランティアに魅力を感じてくれる若者が、果たしてこの先も出てきてくれるだろうか。